萃まる香りと夢と想い

沖田五十六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
萃まる香りと夢と想い

【Ｎコード】
Ｎ３４２１Ｐ

【作者名】
沖田五十六

【あらすじ】
私は鬼だ。博霊神社に居候している。
ふと、昔の事を思い出した。

鬼

古来から、凶暴で悪の象徴とされ、人間から恐れられていた種族。
そして、地上から地底へと住処を変えた種族である。
私もそうだ。昔は、妖怪の山の四天王として君臨していた。だが、
今では昔の話だ。

この旧都には、花は咲かない。地底だから、星空も見えなければ、
月も見えない。唯一、季節を教えてくれるのは、雪だけである。
だから、急とで飲む酒は心なしか少しまずい。酒の肴にするものが
無いからである。

地上で飲む酒は、どれほどうまかったのだろうか？

そう思った。旧都に何十年もいた為、地上での酒の味を忘れてしま
った。

パルスィに頼み、地上――――幻想郷に出てみた。
地上と旧都へ繋がる道の入り口に立った私は、久し振りに見る幻想
郷の景色に、息をのんだ。
そこには、風によって散る、桜の花びらが舞う幻想郷の姿があった。

この幻想郷は、数十年前と変わらない。里も、山も。

しばらく、この風景を見つつ、行く場所を考えた。

人里には行けない。何十年も居なかった鬼が、急に行ったら大騒ぎになる。行けるとしたら・・・

神社しかないか・・・。

神社に移動すると、笑い声が聞こえた。桜の木の陰から覗いてみると、数十人の男女が集まって宴会をしている。花見だろうか？
私は、その宴会に参加しようとした。が、急に鬼が来たら、大騒ぎになって宴会が台無しになる、と思った。けど、一人で酒を飲むよりは、多人数で飲んだ方がうまい・・・筈。

一人で悩んでいると、後ろから声がした。

「何をしているの？」

「！！？」

振り返ると、紅白の巫女の服を着た少女がいた。

「ん？貴方・・・鬼？」

見つかった上に、正体までばれてしまった。
暫く硬直していると、その少女は微笑んだ。

「宴会に参加したいの？」

「え・・・うん。」

思わず、答えてしまった。

「それなら、遠慮せずに行けばいいのに。」

「あ、え？」

この少女は、目の前に鬼が居るのに恐れていない。
鬼は人から恐れられ、排除される。私達には当たり前だ。けど、今の幻想郷ではそのような事は無いらしい。

「さ、行きましょ。」

そう言って、少女は手を差し出した。
私は、その手を取った。

その時の酒は、多分この世に生まれて一番うまかった。桜のおかげでもあろうが、一番の原因は、私達鬼が、人に受け入れられた事であろう。人間の友達も出来た。そして、こう言ってくれた。
――――また、来てくれ、と。

その日から、私は旧都と地上を行き来するようになった。春に行った時は桜。夏に行った時は星空。秋に行った時は月。冬に行った時は雪。それらを酒の肴にし、飲み仲間と飲みあった。時々、仲間の鬼を連れて行ったりもした。

ある時、冬が異常に長かった。後の世で「春冬異変」と呼ばれる異変である。
この異変のせいで、春の花見をする時間がかなり減ってしまった。
この事に激怒した私は、異変を起こそうと思った。

「三日置きの百鬼夜行」

そう言われる異変だ。
私の能力で、人妖の心を萃め、何回も宴会をするようにした。
が、やはり幻想郷を守る巫女は甘くなかった。
異変を起こして４日後、博麗の巫女――――霊夢が私の所に来た。
「やっぱり、貴方が起こしたの？」
「まあ、そうだね。」
「じゃあ・・・決闘ね。」
霊夢は、札を取り出した。
顔にはあの時の笑顔は無かった。

決闘が始まって、丁度一日経った。すでに、お互いに力を消耗し、ぼろぼろになっていた。
「ハァ・・・ハァ・・・」
「まさか・・・霊夢がこんなに強かったなんて・・・・」
「お互い様よ・・・でも、これで最後ね・・・」
霊夢がスペルカードを取り出した。十八番の「夢想封印」だ。
私も、萃鬼「天手力男投げ」を取り出す。
そして・・・

「霊符「夢想封印」！！」

「萃鬼「天手力男投げ」！！」

同時に発動した。

私の記憶があるのは、発動した直後までだ。気が付くと、博霊神社の中で寝かされていた。

「あ、気が付いた？」

振り向くと、あの時の笑顔があった。

「・・・まぁ。」

何故、異変を起こした張本人を助けたのだろう？

「貴方のお父さんに言われたのよ。」

「え？」

「『あの馬鹿娘を暫くの間懲らしめて置いてください。』って。私は『娘を暫くお願いします。』って聞こえたけど。」

いかにも父さんが言いそうなことだ。

この日から、博麗神社の居候になった。

その後、「永夜異変　」「六十年周期の大結界異変」等の異変が起きた。私も、霊夢と一緒に異変解決したりした。「星蓮船」での異変が終わった後は、暫く目立った異変は無くなった。
その時期に、外来人　谷　泉希がやってきた。外の国「大日本帝国」の「陸軍」に所属していたそうだが、紅魔館で調べた結果、スクナビコナと言う酒の神様だったらしい。この結果に、私は喜んだ。酒の神様なのだから、酒を無尽蔵に作ることが出来るからだ。

これが、現在までの私の歴史だ。
そして今日、紅い月が出ている。

また、異変の予感だ。

（後書き）

帝国陸軍上等兵の幻想入り、４００００ＰＶ突破記念です。
～ピアノとｖｏｃａｌの為の萃香八番～孤独～を聞いて思いつきました。

ご意見ご感想をお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3421p/

萃まる香りと夢と想い

2010年12月6日11時49分発行